

# 水俣病を

# 伝えるという運動

ブルデュー実践理論によるアプローチ

文・写真  
平井京之介

現在の水俣病運動とはどのようなものか、それはいかにしていまの形態をとるようになったのか。2005年以来、わたしは自ら運動に深くかかわりつつ、こうした問いを考えてきた。本小論では、フランスの民族学者・社会学者、P.ブルデューの方法論を手がかりとしてこれらの問いに答えようとするわたしの構想を紹介したい。

以下では、まず、なぜいまわたしが水俣病運動に注目するのかという点についてふれる。次に、これまでの研究においてブルデューの「ハビトゥス(habitus)」概念をどう利用したかを略述する。続いて、ブルデューの「界(champ)」概念を用いて水俣病運動の変遷を記述しようとする現在の構想について述べる。そして最後に、2018年に新たに採択されたプロジェクト「ポスト紛争期の水俣における『負の遺産』の生成過程に関する博物館人類学的研究」(科研費基盤研究(C)18K01182)のなかで取り組もうとする課題を紹介したい。



水俣市茂道漁港での相思社水俣まち案内(2013年11月)。